

2019年
12月19日
木曜日

アメリカ合衆国やカナダを訪問するといつも頭を悩まされることがある。それは、レストランで食事をして、タクシイに乗ってもチップを渡さなければならぬという慣習だ。数日間の滞在ならほぼキャッシュレスでやり過ごすことができるような国においても、私は空港から市内へのシャトル運転手と、ホテルのベッドメーカーへのチップのため1ドル、2ドルといった細かい現金が常にポケットに入っているようなチップのせいで少しためらってしまう。

ゲーム理論では複数の意思決定者の間で定着した慣習や起こりうるもつともらしい状況をゲームの解として説明しようとする。特に、相手の戦略を所与として、だれも自らの戦略を変えようとしないうちの状況を示す「ナッシュ均衡」がその代表格だ。

松枝 法道 教授（環境経済学）

チップが面倒でしかたがない

チップが当たり前のアメリカ合衆国のレストランにおいて、受け取りを拒否するウェイターは少ないだろうし、客がチップを置かずに店を出てしまうと何かとても恐ろしいことが起きるのであることは想像に難くない。個人的には、怒り心頭したウェイターが包丁を振りかぶって客を追いかける姿が目につく。それに対して、日本のレストランでは、テーブルに小銭が置かれていたら、ウェイターが小走りにその小銭を客に届けてくれるような気がする。もちろん、客はチップを置く必要がないので、意図的にそんなことはしない。つまり、チップのあるレストランも、チップのないレストランもどちらもナッシュ均衡として説明できるのだ。

では、チップがあることで得をする人はいるのだろうか？ レストランのウェイターではない。彼らの市場

は十分に競争的なので、チップとして受け取る金額が給与からあらかじめ引かれているのだ。得をしている可能性があるのは、店のオーナーだ。しかし、それはウェイターに支払う給料が節約できるからではない。日本では客がオーナーに払った額の一部分が間接的にウェイターへ渡るのが、チップのある国では客から直接的にウェイターに渡る部分が存在する。さらに、その額に15%から20%が標準といった具合に幅が設けられているのも重要だ。それによって、ウェイターが良いサービスを提供すればチップが増えると思えば、ウェイターに努力するインセンティブが生まれ、良いサービスを受けた客はよりリピートする傾向にあるだろうから、チップはオーナーを利する、という理屈だ。

しかし、最近の実験経済学の研究では、Uberなどのライド・シェア

でチップを導入したところ、アメリカ合衆国でもほとんどの客がチップを払わず、ドライバーのサービスがどうこうというよりも、チップを出すかどうかは客の人柄などといった要因の方がずっと大きいという結果が得られており、レストランでも同様の研究結果が報告されている。

アメリカ合衆国では黒人よりも白人、女性よりも男性のウェイターの方がより多くチップをもらう傾向があることを根拠にチップを法律で禁止すべきという議論をする人もいる。大きな動きにはなっていない。実際にチップを払ってウェイターを喜ばすのが好きという人もいるらしい。私のような旅行者にとっては、ただ単に、いつ、どれだけ払えばいいのか分かりにくいので勘弁してほしいと思う日々がこれからも続くことであろう。